

【論 文】

アイヌの鯨類認識と捕獲鯨種

宇仁義和

はじめに

アイヌの鯨類認識について、これまでの研究では、フンペ (=鯨類)、カムイフンペ (=シヤチ)、タンヌ (=イルカ)、オキナ (=不明) という整理が共有されている。しかしながら、これまでのアイヌ語呼称の鯨種への比定は文献研究や聞き取りによるものであり、生物学的知見を踏まえた検討は行われてこなかった。一方、日本での近代鯨類学の始まりは遅く、歯鯨の形態学や分類学は1930年代になって始められた。その後の鯨類学は漁業対象種の資源管理学や骨学を中心に発展したが、漁獲対象ではない小型鯨類の研究はなかなか進まなかった。分布や回遊について、漂着個体の情報を蓄積して考察することは1990年代になってようやく本格化した。よって「噴火湾アイヌの捕鯨」(名取 1940) や『分類アイヌ語辞典動物編』(知里 1976) は、作成時点において鯨類に関する生物学的な知見が不足しており、現在の生物学的の成果の利用によって書き加えたり書き換えるべき内容が含まれている可能性がある。

本論では、アイヌの鯨類呼称に関して現在の生物学的知見からの検討を行ない、鯨種と捕獲対象種の再比定を試みる。

材料と方法

調査対象は文献や聞き取り資料が得られる近世から近代までの北海道アイヌとし、用いた文献や聞き取り資料は活字化されたものやインターネットのウェブページに掲載されたものに限定した。鯨類認識については記述内容を形態学的特徴や現在知られている回遊生態と照合し、もっとも適的な生物学的種に比定した。想像上の存在と思われるものはそのモデル生物を推定した。捕獲鯨種の検討も同様に行なった。

鯨類の分布や回遊の検討は、国立科学博物館がインターネットで提供する「海棲哺乳類ストランディングデータベース」(<http://svrsh2.kahaku.go.jp/drift/>) を用いた。これは日本鯨類研究所が年始めた海生哺乳類の座礁 (=生きたまま海岸線やその近くで動けなくなった個体) や漂着 (=死亡個体が海岸線に流れ着いたもの) のデータベースで、情報は日本全国から寄せられ1990年代後半からの蓄積が著しい。なお、ストランディング *stranding* とは座礁と漂着の両方を含む。

結果と考察

1) 鯨類呼称の検討と生物学的種への比定

アイヌ語の鯨類呼称について、標準的なアイヌ語辞典である『分類アイヌ語辞典動物編』(知里 1976) と「噴火湾アイヌの捕鯨」(名取 1940) を中心に検討した。『分類アイヌ語辞典動物編』には見出し語として「いるか、サカマタ; シヤチ、くじら」の3つを示している。ここに見出しや小見出しとして現れた語について、編集者による語義の解説を含め、形態や行動に関する記述から整理した。

○分類アイヌ語辞典動物編（知里 1976）の鯨類呼称

・いるか

「いるか」については小見出しを11項目を設けているが、形態や行動に関する記述内容は「跳ぶもの」と「先端が切断したようなもの」という2種類のグループが分けられ、その他に特徴が記されていないグループがあり、小見出しは以下の3つに整理できる（知里 1976: 173-174）

跳ぶもの *térke-čironnup térkep kóyka-isepo tuwáyuk, tuwáyuk*
 先端が切断されたようなもの *nisáparo, nusáparo nunókončikor*
 特徴が示されていないもの *tánnu(y) tánnup okóm rokóm móni-humpe*

このうち *okóm* と *rokóm* は「ゴンドオクジラ」、*móni-humpe* は「シロイルカ」と注釈されているが、形態や行動の特徴は記されていないため、「特徴が示されていないもの」に含めた。名取（1940）はイルカについては簡単に「タンヌップは歯や鰭があり全く鯨鬚（フンベレク）がなく、（中略）タンヌップは五〜七尺位のものが多い」と述べるにとどまる（名取 1940: 161）。

海棲哺乳類ストランディングデータベースによる北海道全体でのイルカ（マイルカ科およびネズミイルカ科の鯨類）の記録は2011年12月9日現在で、ネズミイルカ *Phocoena phocoena* 190件（1977-2010年、1997年以降は133件）、イシイルカ *Phocoenoides dalli* 60件（1987-2010年、1997年以降は54件）、カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens* 45件（1959-2010、1997年以降では39件）、シャチ *Orcinus orca* 20件（1925-2010、1997年以降は17件）、シロイルカ *Delphinapterus leucas* 10件（1958-2009年、1999年以降に8件）、ゴンドウ類9件（1957-2010：オキゴンドウ *Pseudorca crassidens* 1件 2010年、コビレゴンドウ *Globicephala macrorhynchus* 2件 1958、2009年、ハナゴンドウ *Grampus griseus* 5件 1957、1959、1999、2004、2006年、種不明ゴンドウ類1件 2007年）、スジイルカ *Stenella coeruleoalba* 1件（2003年）、セミイルカ *Lissodelphis borealis* 1件（2004年）、ハンドウイルカ *Tursiops truncatus* 1件（1987年）、マイルカ *Delphinus delphis* 1件（2006年）である。数多く記録されているのは、冷水性のネズミイルカとイシイルカ、そしてカマイルカであり、その他のイルカと名の付く動物は記録があっても1件に限られることから、「いるか」はこの3種を指している可能性が高い。ただし、他にも日本語ではイルカとは呼ばない小型の鯨類が存在する。

◎「跳ぶもの」はカマイルカと考えられる

観察頻度が高い3種、カマイルカ、ネズミイルカ、イシイルカのうち身体全体を水面から出して跳ぶのはカマイルカに限られる。またカマイルカは上記3種のうちで唯一数十頭から時に数百頭に至る大群を形成する。菅江真澄が「えぞのてぶり」で描いた「黒魚許多」の挿絵は、多数の黒灰色の大型の魚あるいはイルカが水面に群れ、一部は空中に飛び上がっている様子で、群れは2つで小さい方は8頭、大きな集団は40頭以上、空中には7頭が描かれている（菅江 1987: 161）。注記は「黒魚許多（タンノホロノカキ）」とある。海面に多数が群れ集まり、空中高く飛び跳ねていること、全身が黒く背びれが強調されていることは鯨類の特徴である。逆に絵では、尾柄部近くに小さなひれがあること、尾びれが上下方向に描かれており、これは魚類の特徴であるが、全体的にはカマイルカの印象が強い。

よって、跳ぶもの *térke-čironnup térkep kóyka-isepo tuwáyuk, tuwáyyuk* などはマイルカと考えられる。

◎「先端が切断されたようなもの」はコマッコウ類の可能性はある

日本語でいうイルカの特徴のひとつに細長いくちばしの存在がある。英語ではイルカは2つの言葉で表され、くちばしのある *dolphin* と くちばしのないあるいは小さく目立たない *porpoise* で、それぞれマイルカ科とネズミイルカ科に比定される。いずれも吻部は尖っている。一方、吻部先端が切り落とされたような形態を持つ小型の鯨類にコマッコウ科がある。この科にはコマッコウ *Kogia breviceps* とオガワコマッコウ *K. simus* の2種のみが属し、最大体長は前者が3.7m、後者は2.7mである。一般には知られていないが珍しい種類ではない(加藤1996)。日本近海でしばしば見られ、海棲哺乳類ストランディングデータベースによると北海道では森町、苫小牧市、浦河町から両種あわせて1997-2006年に4回の座礁漂着記録があり、比較的観察例数が多い。ほかに吻部が尖らないものにゴンドウクジラの仲間があるが、形態描写としては丸い頭などとなると想像され「先端が切断されたようなもの」とは形容されないため、可能性は低い。

よって、先端が切断されたようなもの *nisáparo, nusáparo nunókončikor* はコマッコウないしオガワコマッコウを指していた可能性がある。

◎ゴンドウクジラが利用された可能性がある

谷元旦が寛政11年(1799)に描いた「蝦夷記行図 上」に「イルカの魚を食」と注記された図がある(「北海道大学北方関係資料総合目録」 <http://www.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/> の「蝦夷記行図 上」

[http://www.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/kyuki.cgi?id=0A003110000001000&title= 蝦夷記行図%20%20上%20%2F%20谷元旦&page=1&lang=0](http://www.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/kyuki.cgi?id=0A003110000001000&title=蝦夷記行図%20%20上%20%2F%20谷元旦&page=1&lang=0) では6ページ目 2011.12.9閲覧)。同様の図はおなじ谷の「蝦夷風俗絵巻」にもある(北海道開拓記念館 2007: 15)。これらの図のなかで調理されるイルカは、胴の左半分では肉が取り除かれ背骨が見えており、外部形態は頭、左胸びれ、背びれ、尾びれが確認でき、全部が黒色である。北海道沿岸で記録された鯨類で頭部全体が黒色なのはイシイルカとコビレゴンドウ、そしてオキゴンドウに限られる。イシイルカの腹部は白色だがこの図では取り除かれており確認できない。また、背びれや尾びれの端が灰色あるいは白色部分がある。さらにイシイルカは人物との対比ではもっと小さく、頭部が小さく吻部が尖っている。一方、コビレゴンドウやオキゴンドウの体色はこの図ほどには黒くはないが全身が濃黒灰色であり、尖らないまるい頭部、頭部と人物との大きさの対比からすれば小型のコビレゴンドウまたはオキゴンドウの方が近い。

他の文献や絵図にゴンドウ類と考えられる記述は得られず、「蝦夷記行図」の絵も写実性が不十分であるが、ゴンドウ類が利用された可能性はあるだろう。

・サカマタ ; シャチ

「サカマタ ; シャチ」はカタカナ記載であり方言や総称ではなく、生物学的種として示されている(知里 1976: 174-176)。小見出し19項目が示されているが、形態や行動に言及したものはない。しかし、形態的に識別がきわめて容易であることから、別の種を指して呼ぶことはなかったと推測できる。アイヌは生きたシャチの捕獲は行わなかったようであるが、斜里での聞

き取りのように、死んで漂着したものは食料にすることがあったらしい（更科 1955）。実際、2005年2月には知床半島南岸の羅臼町相泊でシャチの11-12頭の群れが流氷で集団座礁した。おなじような事例は斜里、北見枝幸、国後島、択捉島などから80年間で7例が知られている（Uni et al. 2005）。前述のとおり北海道全体で座礁漂着記録が20件と比較的多いことから、オホーツク海などでは流氷で座礁した、他の地域でも何らかの原因で座礁漂着したシャチを食べることもあったのだろう。

よって、repúnkamuy やその派生語はシャチと考えて間違いがない。

・くじら

「くじら」の小見出しは補注を除いて24項目あるが形態や行動の特徴を現したものは次の6項目である（知里 1976: 176-178）。

- oáspeus-humpe （尻の方に・背びれの・ついている・クジラ）
- osákanke-humpe （さわぐ・クジラ）
- otápoye-humpe 砂を・かきまぜる・クジラ
- ipóye もの・かきまぜる・もの
- yáki-humpe セミ・クジラ
- áspepuyo 背びれ・穴・ついている

áspepuyo を除き、すべて名取（1940: 156-161）に現れる名称であることから、以下は名取の記載を考察する。

○噴火湾アイヌの捕鯨（名取 1940）の鯨類呼称

名取（1940）「噴火湾アイヌの捕鯨」では、採集した鯨類呼称をヒゲクジラ5種類とマッコウクジラに比定した（表1）。名取の記載は簡潔で、その根拠については明確には述べられていないが、体長やひげ板の色、体色や模様、季節回遊、行動などが比定の理由となっているようである。本論では現在の形態や回遊の知見を用い、ナガスクジラ属（族）のなかから比定されたヒゲクジラはすべてミンククジラであるかその可能性が高いと考える（表1）。

表 1. 名取（1940）「噴火湾アイヌの捕鯨」によるアイヌ語呼称の再比定

アイヌ語呼称	名取の比定（現在の和名）	本論での検討結果
ノコルフンベ	小鰭鯨（ミンククジラ）	ミンククジラ <i>Balaenoptera acutorostrata</i>
シノコルフンベ	鰭鯨（イワシクジラ）	ミンククジラ <i>Balaenoptera acutorostrata</i> ?
オアシペウシフンベ	長鬚鯨（ナガスクジラ）	ミンククジラ <i>Balaenoptera acutorostrata</i> ?
クツタルフンベ	長鬚鯨族（ナガスクジラ属）	ミンククジラ <i>Balaenoptera acutorostrata</i>
オケクシユフンベ	長鬚鯨族（ナガスクジラ属）	ミンククジラ <i>Balaenoptera acutorostrata</i> ?
オシャカンゲフンベ	児鯨（コククジラ）	コククジラ <i>Eschrichtius robustus</i>
ヤキフンベ	抹香鯨（マッコウクジラ）	マッコウクジラ <i>Physeter macrocephalus</i>

海棲哺乳類ストランディングデータベースによると、北海道全体でのヒゲクジラの記録は2011年12月9日現在で、ミンククジラ *Balaenoptera acutorostrat* 237件（1981-2010年、1997年以降に206件）に対し、ザトウクジラ *Megaptera novaeangliae* 6件（1988-2010年、1998年以降に5件）、コククジラ *Eschrichtius robustus* 3件（1995, 1996, 2007年）、ナガスクジラ *Balaenoptera physalus* 2件（1930, 2009年）であり、シロナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ、カツオクジラ、ツノシマクジラ、セミクジラ、ホッキョククジラは記録がない。北海道沿岸で観察されるヒゲクジラは圧倒的にミンククジラが多く、大型種は稀であることがわかる。ただし、大型のヒゲクジラは商業捕鯨による減少が激しく、セミクジラは19世紀に、コククジラは1910-20年代に激しく捕獲されて絶滅寸前となった。ナガスクジラの北海道沿岸での捕獲は1910年代に始まり、開始直後に捕獲のピークがあり、その後は1960年代まで僅かながら捕獲されたが、1910-20年代に相当数の資源の減少があったと想像される。よって、大型ヒゲクジラについては、近世アイヌ文化期とは回遊様式や観察頻度が異なる可能性は考えられるが、この点が及ぼす影響については後で考察する。

以下、名取（1940）の比定についての検討結果を述べる。

◎ノコルフンベはミンククジラで間違いない

名取はノコルフンベの特徴を「上下顎とも歯がなく、鯨鬚（フンベレク）があって白く、背鰭があり皺積（トウナイ）があり、噴気孔（タシンプイ）を有し、体長は比較的小さく、背面は暗黒色で、腹面は白く、比較的柔和^{なまやま}となく、春秋二季に多く見られ、小魚群を追ってゐる如くである」と述べている（名取 1940: 158）。すべてミンククジラの外部形態の特徴とよく一致している。体長に関する数値は記されていないが、ひげ板の全部が白色のクジラはミンククジラとコククジラの2種に限られる。ひげ板列が部分的に白色板で構成される種に2003年に新種記載されたツノシマクジラがあるが、右のひげ板列は前列が白色、後列が黒色で中央部は白黒、左は前列から白黒で後列は黒色である（Wada et al. 2003、和田 2004）。また、この種は暖帯性であり北海道近海での観察事例がない。後述のとおりコククジラが識別されていること、小型であるという記載からノコルフンベは名取の記述のとおり小鯨鯨（コイワシクジラ）すなわちミンククジラと考えて間違いない。

◎クツタルフンベはミンククジラである

クツタルフンベは「歯は無く鯨鬚の先が白く、根は稍黒みがある。背鰭があって、体の形はノコルフンベに似て居る。四月から五月に掛けて、湾内へ這入り、十二月にも稀に見る事があった。比較的柔らかなフンベである」（名取 1940: 159-160）とされている。種までは判別せずに長鬚鯨族（ナガスクジラ属）に区分された。イワシクジラは出生体長が約4mとミンククジラの幼獣と体長で重なるが、頭骨はミンククジラやニタリクジラに比較して細長い（藤瀬ほか 2004: 74-76）。そして北海道大学植物園博物館所蔵の「クジラ頭骨」（資料番号 33357）は形態からミンククジラである。ひげ板の説明では「根は稍黒みがある」が一枚のひげ板のことか、ひげ板の連なり全体の前か後ろかなのか明確でないが、もし一枚のひげ板の説明ならば先端の毛の部分が白色、板状の部分が「やや黒い」ということであり、ひげ板の連なり全体であれば前方のひげ板は白く、後方はやや黒いという描写である。「稍黒い」のが加齢による色素沈着などの理由で黒ずんだ結果かもしれないが、また日本近海のミンククジラでもひげ板の一部に黒色部分を持つ個体が少数存在する（Kato et al. 1992）。他のナガスクジラ属のひげ板であれば、ナ

ガスクジラは褐色で白色部分がない、イワシクジラはふつう黒色のみであるが、一部に吻端付近にわずかに白色のひげ板を持つ個体もいるが（藤瀬ほか 2004: 66-67）、このような説明とは合致しない。これらから、名取が採集したクツタルフンベの頭骨はミンククジラの幼獣と判断できる。

◎シノコルフンベ、オアシペウシフンベ、オケクシユフンベもすべてミンククジラの可能性が高い

シノコルフンベはシ・ノコルフンベとし、鯨（イワシクジラ）に比定されている。その特徴は「上下顎とも歯がなく、鯨鬚を有し、背鰭があり、皺積と噴気孔を有し、腹面は白く、背面は暗黒色であるが、側面は斑状に乱れてゐる。体の形は、前種より稍細長く、長さも少し大きい。春季に多く見られるが、夏にも稀に見られる」（名取 1940: 158）とされている。しかし北太平洋のミンククジラの体長は最大で8m（藤瀬 1996）なのに対してイワシクジラの最大体長は18.6mとはるかに大きい（河村 1996）。名取が記述したような「少し大きい」程度ではない。「少し大きい」とはイワシクジラの幼獣かもしれないが、それよりもミンククジラの成長の違いである可能性を排除できない。後述の「クツタルフンベ」については、昭和13年（1938）6月2日に催された「フンベ送り」で用いられた写真が残されているが（名取 1940: 152-155）、この個体が北海道大学植物園博物館所蔵の「クジラ頭骨」（資料番号 33357）とすれば、サイズはL80.3 W57.0 H27.1 cmである（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 2010: 93-94。計測部位は不明）。斜里町立知床博物館には体長795cmのミンククジラの頭骨が所蔵されており、サイズは最大部分で L170 W93 H61 cmとはるかに大型であり、名取が採取したクジラに比べれば「やや大きい」サイズは十分にある。「海棲哺乳類ストラレンジングデータベース」に北海道のミンククジラは1997年以降に206件が記録されているが、その体長は4-8mと変異が大きい。大型個体の記録は少なく、体長記載のある個体では4-5mのものが多い。

イワシクジラの背びれは体長に対して高く、ナガスクジラ属では最も目立つが、この特徴は記述されていない。北西太平洋の資源状態は、近代捕鯨開始以前の初期資源量が42,000頭に対し、1987年からの目視調査では28,400頭と3分の2に減少と推定されている（藤瀬ほか 2004: 92）。一方、海岸への座礁や漂着については「海棲哺乳類ストラレンジングデータベース」では北海道からの記録がないことは、もともと北海道の沿岸には回遊が極めて少ないことを示唆している。

体色について「側面は斑状に乱れてゐる」についてはダルマザメの噛み跡かもしれない。ダルマザメは深海性のサメで鋭い歯で食いちぎられたクジラの皮膚には円状の跡がながく残る（写真1）。これは多くの鯨種で見られ、イワシクジラに特有のものではない。北海道沿岸のミンククジラでも見られ、網走の小型捕鯨従事者は「トタン鯨」と呼んでいる。やせており、おもに春に見られるというのは、出産後の個体なのかもしれない。

また、名取がシノコルフンベをイワシクジラとしたのは、日本語のイワシクジラに対するコイワシクジラという名称の対比から、nokor-humpe がコイワシクジラならば si-nokor-humpe は大きなノコルフンベ、すなわちコ（小）がないイワシクジラだろうという推論かもしれない。ノコルフンベとシノコルフンベはミンククジラの身体の大きさの違い、あるいは体色の違いを表したものと考えることは十分可能である。



写真1. ダルマザメに皮膚を食いちぎられた跡が多数残るアカボウクジラ（2007年4月 斜里）

オアシペウシフンベは「上下顎とも歯がなく、鯨鬚があり、背鰭が尾に近い所にあるので、オアシペウシと呼ばれる。噴気孔があり、体は細長く、皺積もあって、カモイフンベに垂いで乱暴である。体の色はノコルフンベより稍淡く、湾内には春来て夏中居る事もある」（名取 1940: 158-159）と記述されている。名取は長鬚鯨（ナガスクジラ）としているが、本種はシロナガスクジラに次いで大きく、北太平洋産の成長を停止したメスの平均体長は19.4mである。太平洋では沿岸域には回遊せず外洋性であり、背面の体色は黒く、下あごの色彩は左右非対称で左側は黒く右側は白い（大隅 1996a）。名取の記述のうち、ナガスクジラの識別特徴といえるのは「背鰭が尾に近い所にある」という点であるが、最も目立つ特徴である体長や褐色のひげ板に関する記述がない。この点について、これらが見慣れたクジラと同様と考えれば、オアシペウシフンベはミンククジラとするのが自然である。

オケクシフンベは「歯はなく、鯨鬚の色は暗く、背鰭があり、皺積も多い。体の色は腹は白く背が暗黒色である。春に来て湾内に這入り、夏中見えるが、越年はしない。このフンベは味がよい為食べ過ぎて腹を壊し、下痢するのでかく呼んでゐると云ふ。オケクシとは下痢する事である」（名取 1940: 160）と説明されている。この鯨は長鬚鯨族（ナガスクジラ属）とされたが、それを支持する記載は見られない。ノコルフンベとの違いを示す体長の記載もなく、これもミンククジラの可能性が考えられる。

以上のことから、名取がナガスクジラ属の4-5種類としたアイヌ語呼称は、ミンククジラ以外の種であるという明確な客観的な記載事項は見られないことから、鯨類の回遊状況を考慮するとすべてミンククジラの可能性が高いと考える。

◎なぜミンククジラに多くの名称が用いられたのか

以上のように考察した場合、噴火湾ではミンククジラ 1 種に対し5つの異なった名称が用いられていたことになる。ただし、これらの呼称が継続的に用いられた名称なのかは不明であるが、生物学的には単一種であっても集団にとって重要な場合、個体全体を表す民俗名称が複数あるいは多数存在することはしばしば見られる。近代の小型捕鯨の従事者でも捕獲した時期や海域、大きさや色彩、太り具合などの見た目、行動などによって異なった呼称が用いられている。たとえば、網走の業者はツチクジラの大型個体を「あかつち」、小型ものを「くろツチ」や「からす」と呼び、銚をかわして逃げる個体は種類を限定せずに「こすいくジラ」という（筆者の聞き取りによる）。鯨類は非常に目立つ存在であり、ちいさな湾に数日とどまることがあれば現在でも地域の話題にも上り、他とは違う特別なクジラと認識される。このような目

立つ行動をとる個体に対して、特別な呼称が用いられることは十分考えられる。

◎オシヤカングフンベとオタポエフンベはコクジラで間違いない

オシヤカングフンベは兎鯨（コクジラ）とされた。名取の記述は「歯はなく、鯨鬚があり、背鰭もあるが、皺積がない。体の形は太長く頸部稍張って居る。体の色は、背腹とも余り異ならず、暗黒色である。体にカキ殻が沢山附着してゐる。割合磯近く来る鯨で、他のフンベの潮を吹く音が、フム……ときこへるのに、オシヤカングのはもっと鋭く大きく聞へる。危険な鯨で、なるべく銚をつけない。一名オタポエフンベとも呼んで居る。即ち海底の泥や砂を掻き揚げる如くに、一町四方も米の磨ぎ汁のやうに、白く濁らせるのでこの呼称が出てゐる」（名取 1940: 160）で、「皺積がない」「躰の色は、背腹とも余り異ならず」「割合磯近く来る鯨」は本種の特徴をとらえている。ただし、「背鰭もある」は誤りで実際には背びれはなく、代わりに背中後方に6-12個こぶがある。体色は「暗黒色」というよりも灰色である。「躰にカキ殻が沢山附着」はフジツボのことと考えられる。行動面では「危険な鯨」というのは英語での別名 *devil fish* を思わせ、「海底の泥や砂を掻き揚げる如くに、一町四方も米の磨ぎ汁のやうに、白く濁らせる」は海底の砂や泥をあさって餌を取る本種の索餌行動をよくとらえている。よって、オシヤカングフンベとオタポエフンベはコクジラで間違いない

名取が聞き取りした話者の観察年代と観察頻度が不明であるが、コクジラの西部個体群は1910年代に捕獲が最大となり、1930年代にはほとんど捕獲されないほどにまで減少した（大隅 1995）。その後はきわめて少数が生き延び、2010年代の推定個体数は130頭である。西部個体群の夏を過ごす索餌海域は樺太北部のオホーツク沿岸であり、冬越しと出産海域は知られていないが中国大陸南部沿岸と想像されている。回遊様式については詳しい研究はなされていないが、本州太平洋岸では春から夏にかけて目撃されることがあり、伊勢湾では数十日間滞在したり（Furuta 1984）、1993年に伊豆半島沖で索餌行動がビデオ撮影されていることから（大隅 1996b）、北上回遊は湾内での数日から数十日間の索餌行動を伴いながらと予想される。現在の北海道での索餌海域は知られていないが、明治時代には春に北海道の日本海沿岸でニシンの卵を食べていたことが知られている（村尾 1897、佐藤 1900、田子 1922）。「泥や砂を掻き揚げ」「米の磨ぎ汁のやうに、白く濁らせる」ことは噴火湾でも餌を食べていた傍証となり、行動や生態、保全の意味から重要な記録である。

なお、明治大正期の北海道の捕鯨業者は本種をガンケと呼んでいた（佐藤 1900, 1901）。この呼称は日本語の鯨類呼称を近世から現代に至るまで収集分類した粕谷・山田（1995）には記載されていない。北海道独自の言い方でアイヌ語起源と考えられ注目される。

◎ヤキフンベはマッコウクジラである

ヤキフンベは「これは湾内には殆んど見ないフンベで、何十年か前に一度、室蘭のイタンギ浜に寄り鯨となった事がある。大きい歯があつて、皺積は数本しかなく、頭部が巨大で、其の恰好が他のフンベと全く違って、蟬の頭部の形に似てゐるから、ヤキフンベと呼んだのである。ヤキとはアイヌ語で蟬の事である」（名取 1940: 160-161）と記述されている。これは抹香鯨（マッコウクジラ）と比定されたとおりで、「大きい歯があ」る、「頭部が巨大で、其の恰好が他のフンベと全く違って、蟬の頭部の形に似てゐる」などは本種の特徴をよく描写している。よってヤキフンベはマッコウクジラで間違いない。

ここで名取から離れ、ほかのアイヌ語呼称について検討を加える。

◎オキナはマッコウクジラがモデルかも知れない

オキナ／ヲキナについては想像上のものであるが、モデル生物はマッコウクジラの群れとする指摘がされている（渡部 1993: 48-49）。この指摘は妥当なものと考えられる。たとえば、古川古松軒「東遊雑記」では「今も松前よりヲキナの牙を持帰り、三味線の撥などにするなり。象牙に粗似たる物也」（竹内ほか編 1969: 538-539）、松前広長「松前志」では「元禄五年壬申夏五月西部シマコマキの蝦夷オキナの牙を領主へ呈せしこと旧記に見へたり」（寺沢ほか編 1985: 165-167）という記述があり、三味線の撥に加工でき、領主に見せるほどの大きさからこれらはマッコウクジラの歯を示している。

マッコウクジラはナガスクジラ属の鯨とは形態や行動が大きく異なる。非常な驚きをもって観察され、それがオキナ伝説に発展していったのかもしれない。

○最上徳内「蝦夷國風俗人情之沙汰」および串原正峯「夷諺俗話」に現れる鯨類呼称

近世文献のうち鯨類の呼称を比較的多く採録しているものに最上徳内「蝦夷國風俗人情之沙汰」（高倉編 1969: 439-484）と串原正峯「夷諺俗話」（高倉編 1969: 485-520）がある。前者は1785-1786年（天明5-6）に行われた北海道から国後、択捉、国後島までの調査の記録で、異名本に「蝦夷草紙」がある。後者は1792年（寛政4）、松前から日本海岸を通って宗谷に至り、千歳越えで戻った旅の見聞録で、翌年に完成している。ここに見られる鯨類の記述は次のとおりである。

「蝦夷國風俗人情之沙汰」（高倉編 1969: 463）

イルカ ヲゴン、テンケチロンノブ、レブンカモイ、トワユク、コシコンブ、イカラカモイ、ネハイコイキカモイ、イチムケ、フンベコイキ、九種類皆イルカなり。

鯨 ノコル、ドナイ、フレンベ、タンエベ、ユクンベ（ヤヲヌンベ）、ヲキナケンベ、イドチケレ、ヲアカウシ、凡九種あり。皆鯨なり

「夷諺俗話」（高倉編 1969: 515）

鯨の事

蝦夷地の海に鯨多し。予も度々鯨の汐を吹を見たり。船へ間近く来る時は、舟中のものヲエベスへ（くりかえし記号）と聲を立る。鯨を見付ても船中にては鯨といふ事をいみ言葉にて、右のことくいふ事なり。夷言にはフンへと云。鯨にも品々あり。左のことし。

クタルヘンベ イツチケシ イハルコトナイ タンネンベ ユクンベ トナイフンベ シドファイ ヲワカフシ イシヨホンベ ニセフンベ チエヘフンベ ホンホロンベ ホロフンベ アイノフンベ ヲキルケ

此内フーレンベというは一名チカフンベともいふ。此鯨よりは赤き油出るよし。ユクンベという鯨には腹に鹿の足あとのことき形有となり。トナイという鯨の腹には畦溝のことくなる所あるよし。鯨十七品ある内にヲキルケ斗り歯あるよし。

一方、名取（1940）に採録の鯨類呼称は、上記の大型鯨類のほかにシャチと比定されるカムイフンベ、イルカ類としてタンヌツブ、トワイユツク、ヌノコンチコルが含まれている。これらとこの2つの近世文献と共通する呼称はシャチに関連するレブンカモイやカムイフンベを除けば、共通するものがほとんどない。その理由として地域的な違いや18世紀末以降は噴火湾を除いて捕鯨がほとんど行われてこなかったことなどがあげられている（渡部 1993: 48）。この

2つの近世文献に現れる鯨類呼称はカタカナ書きで、説明が少なく図が添えられていないため、これ以上の考察は困難である。本論では次の点を指摘するに留める。「夷諺俗話」に現れる「ユクンベ」は「腹に鹿の足あとのことき形有となり」という特徴から、前述のダルマザメの噛み跡が目立つ鯨かもしれない。

2) 捕獲鯨類の検討

以上の考察から、現在入手可能な資料からは、詳しい聞き取りを証拠としてアイヌが積極的に捕獲したと考えられる鯨はミンククジラ 1 種である。イルカについては、菅江の図絵からカマイルカが、回遊状況からイシイルカとネズミイルカを加えた 3 種が捕獲対象であったと推測できる。ゴンドウクジラについては、図絵の存在から利用された可能性が指摘できるが、捕獲については考察する材料がないため、その可能性を指摘することとどめる。

謝辞

本論を作成するにあたり以下の機関や個人にお世話になりました。お礼申し上げます：北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立図書館、網走市立図書館、東京農業大学オホーツク学術情報センター、石川創氏、永塚翔佳氏、竹内賢士氏、福岡昇三氏、三好浩治氏、山田格氏、渡部裕氏。

なお、本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究 (B)「アイヌの捕鯨の再検討」により行ないました。

引用文献

知里真志保

1976 「分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」『知里真志保著作集別巻 1』平凡社
藤瀬良弘

1996 「ミンククジラ」『日本動物大百科 第2巻 哺乳類II』pp.44-45, 平凡社
藤瀬良弘・田村 力・坂東武治・小西健志・安永玄太

2004 『イワシクジラとニタリクジラ 鯨研叢書 No.11』日本鯨類研究所

Furuta, Masami

1984 Note on a gray whale found in the Ise Bay on the coast of Japan. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.* 35: 195-197.
北海道開拓記念館

2007 『第63回特別展図録「鯨」』北海道開拓記念館
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

2010 『北大植物園資料目録第6号アイヌ民族資料』北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 <http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/muse/pdfs/cat06.pdf> (2011.12.15閲覧)

粕谷俊雄・山田格編

1995 『鯨研叢書 第7号 日本鯨類目録』日本鯨類研究所

加藤秀弘

1996 「マッコウクジラ類」『日本動物大百科 第2巻 哺乳類 II』pp.50-55, 平凡社

Kato, Hidehiro, Yoshihiro Fujise and Shiro Wada

1992 Morphology of Minke Whales in the Okhotsk Sea, Sea of Japan and off the East Coast of Japan, with Respect to Stock Identification. *Rep. int. Whal. Commn* 42 : 437-442.

河村章人

1996 「イワシクジラ」『日本動物大百科 第2巻 哺乳類 II』pp.40-41, 平凡社

村尾元尾

1897 『北海道漁業志要』三松堂

名取武光

1940 「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』3: 137-161, 北海道大学北方文化研究室

大隅清治

1995 「コククジラ」『日本の稀少な野生水生生物に関する基礎資料 (II)』 pp.513-520, 日本水産資源保護協会

1996a 「ナガスクジラ」『日本動物大百科 第2巻 哺乳類 II』 pp.38-39, 平凡社

1996b 「コククジラ」『日本動物大百科 第2巻 哺乳類 II』 pp.34-35, 平凡社

更科源蔵

1955 「斜里アイヌ」『斜里町史』 pp.169-230, 斜里町

菅江真澄 (内田ハチ編)

1987 『菅江真澄民俗図絵 上』 岩崎美術社

佐藤 隆

1900-1901 「北海道捕鯨誌」『大日本水産会報』 216: 292-296, 221: 587-592, 233: 1318-1325, 大日本水産会

田子勝弥

1922 「日本近海に産する鯨族に就きて」『動物学雑誌』 34: 446-479, 図版15 (1-4), 日本動物学会

高倉新一郎編

1969 『日本庶民生活史史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』 三一書房

竹内利美・森喜兵衛・宮本常一編

1969 『日本庶民生活史史料集成 第3巻 探検・紀行・地誌 東国篇』 三一書房

寺沢 一・和田敏明・黒田秀俊編

1985 『蝦夷・千島古文書集成 第1巻』 教育出版センター

内田武志・宮本常一編

1971 『菅江真澄全集 第2巻』 未来社

Uni, Yoshikazu, Aota Masaaki and Tateyama Kazutaka

2005 Ice-entrapment of Killer Whales in the Sea of Okhotsk. *The 16th biennial conference on the biology of marine mammals* : 287-288.

和田志郎

2004 「新種のヒゲクジラの発見」『中央水研ニュース』 34: 1-2, 水産総合研究センター中央水産研究所 <http://nrifs.fra.affrc.go.jp/news/news34/wada.pdf> (2011.12.15閲覧)

渡部 裕

1993 「蝦夷地における動物名称の認識とアイヌの生業」『北海道立北方民族博物館研究紀要』 2: 45-58, 北海道立北方民族博物館

(うに・よしかず／東京農業大学生物産業学部)